令和７年度
スクール・エンパワーメント推進事業　取組み成果リーフレット

テーマ：情報活用能力を通じて、子どもの主体性を引き出す

情報活用能力をはぐくむモデル校
門真市立門真小学校

つけたい力

子どもが課題意識をもち、情報を集めて判断しながら主体的に学び、ICTを活用して協働の中で自分の考えを伝える力を育成する。

取組みの概要・ポイント

取組の具体　QRコード

・大阪府「情報活用能力ステップシート」を基盤に、系統的な育成と主体的な学びの実現をめざした。
・本校では、「情報活用能力を通じて、子どもの主体性を引き出す」を研究テーマとして一年間取り組んだ。
・めあてと一体化したふりかえり指導を通して、子どもが自分の学び方を深める授業デザインの研究を進めた。

具体的な取組みの内容

①子ども主体の授業デザインの共有（部会：泰山先生の講話）

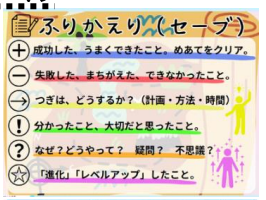
中京大学の泰山先生から、情報活用能力をどのように育成していくかなどのお話を受けて、日々の授業実践に生かすために、子ども主体の授業デザインを確認し合いました。「教科の力を伸ばす時間と、主体的に取り組む時間のバランスをとること。はじめは時間がかかるかもしれないが、信じて取り組んだ学校だけが成果を得られる」といった話が印象的でした。

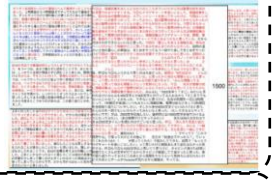
②学びスキルとICT操作スキルの校内系統表の作成

教科学習でも、系統的に学習することが大切ですが、情報活用能力も同様に積み上げが大切だと考えます。教科の系統に位置付けているスキルは、教科の中で順に学んでいきますが、研究をスタートさせて、はじめに困ったのが「学びスキル」「ICTスキル」です。大阪府のステップシート、他校の系統表を参考に、子どもも教師も何をどうすればいいか分かる門真小に合ったものを作りました。各クラスで見通しをもって取り組んでいます。

③ふりかえり実践交流→観点表づくり

子ども主体の授業デザインのサイクルを子ども自身で回すために1番のポイントは、「ふりかえり」だと考えます。自分の学び方がどうだったか、うまくいったこと、いかなかったこと、そして次にどうしたら自分の学び方をさらに成長できるかをふりかえることが大切です。
ふりかえりは、量ではなく質ですが、まず半年は量を求めて取り組みました。





④研究実践の交流（部会、学年会、日常的にchatを活用）

毎月の部会、日常の学年会で授業や子どもの話を交流するとともに、各学年の実践を全体のものにしていくために校内chatを活用しました。
「今日は、ロイロノートの〇〇という思考ツールを使ってみました。」「ふりかえりの価値づけを～～しています。」のように、小さな物語をこまめに発信することで、学年を超えたチャレンジや校内の研究熱が醸成されていきました。
ドキュメント形式のレポートは、本校の研究ページでもご覧いただけます。

⑤ICT自主研修（学級通信、AI活用、ロイロノートなど）

年度初めのクラスづくり。若手の先生を中心に集まった輪にベテランの先生のアドバイスが飛びます。お菓子を囲んで、「〇〇さんにどう寄り添ったらいいかな？」と悩んでいることを相談したり、学級通信講座をしてほしいというリクエストを受け、生成AIを使って文章やイラストを作成して、短時間で通信をつくるノウハウを学びました。新しくロイロノートが導入されたことを受け、使い方講座や実践交流も短い時間で実施しています。5分から15分の時間なら忙しい日常でも持続可能です。

⑥公開授業…5/29 2年:生活　6/16 3年:総合・4年:国語　7/2 3年:国語・5年:社会・支援:自立活動　9/22 6年:総合　11/14 1年:国語・2年:国語・3年:算数・4年:国語・5年:国語・6年:総合

授業準備は大変ですが、実際にどのように学習しているか見合うことで、子ども主体の授業について校内で深めていく一番のきっかけになりました。
どの学年も授業を公開するたびに、熱を帯びていきました。

取組みを通しての子どもの変容

本校では、情報活用能力を軸とした授業改善に取り組む中で、子どもたちの学びの姿に具体的な変容が見られました。大阪府「情報活用能力ステップシート」をもとに、学習スキル・ICT操作スキルを系統的に位置付けたことで、子どもたちは「何を学ぶのか」「どう学ぶのか」を意識し、必要な情報を自ら集め、整理・比較しながら学習を進めるようになりました。中でも、「学び方のふりかえり」に重点を置くことで、主体的な学び方が広がってきました。授業では、ロイロノート等を活用して考えを可視化し、友だちと見せ合い、伝え合う場面が日常的に見られるようになり、協働的に学びを深める姿が広がっています。情報活用能力アンケートにおいても、ICT活用頻度や情報の収集・整理・伝達に関する肯定的回答が全校的に向上しました。特に6年生では、こうした学びの積み重ねが教科学力にも表れ、単元テストで8割未満だった児童の割合が、7月22%、12月18%へと減少しました。 また、校内では授業実践やふりかえりの交流、研修や公開授業、日々のchat交流を通して、教員同士が学び合う文化が育ち、授業改善への意識と熱量が高まっています。こうした子どもと教員がともに学び続ける学校づくりが、子どもの主体的な学びを確かに支えています。